
「主の主権と愛によって整えられる教会」

コリント人への手紙 第一 16章5~12節

【主題】 教会の歩みは私たちの思いつきや感情によるのではなく、
【主】の主権のもとで、愛によって整えられていくべきである。

1) パウロの訪問計画 (16:5-9)

－ コリント教会への愛と【主】の主権 －

◆ 腰を据えた愛 (5~6節)

- ・ パウロはコリント教会に「旅のついで」ではなく、冬を越すことを念頭に置いた深い関わりを計画
 - ・ 問題の多い教会だからこそ、距離を置かず、じっくり向き合おうとした
 - ・ 「送り出してもらおう」＝祈り・必要の充足・宣教支援の決心をもって送り出すこと
- 多くの問題を抱えていても、諦めず期待する—それが真の教会の関係

◆ 【主】の許しを大前提にした計画 (7節)

- ・ パウロは具体的な計画を立てながらも「主がお許しになるなら」と言う
 - ・ 信仰とは無計画ではなく、計画を絶対視しないこと
- 自分の願いを【主】の御心より優先しない姿勢

◆ 【主】の御業があるところに留まる決心 (8~9節)

- ・ エペソに「実り多い働き」が開かれていた—実際に救われる人が起こされている状況
 - ・ 「反対者も大勢いる」—神の御業がある場所には妨害・妨げも生じる
- 困難があっても【主】の御業を優先し、そこに加わり続けることが大切

2) テモテについて (16:10-11)

－ 主のみわざに励む働き人を軽んじてはならない －

◆ テモテの状況

- ・ テモテはパウロにとって「愛する、主にあって忠実な子」 (4:17)
- ・ おそらく内向きで遠慮がちな性格 (II テモテ 1:7 参照)
- ・ 「我が強い」コリント教会の人たちの中で軽んじられる可能性があった

◆ パウロの願い（10～11 節）

- ・ 「心配なく（恐れなく）過ごせるようにしてあげてください」
- ・ 理由：「彼も私と同じように、主のみわざに励んでいる」から
- ・ 「だれも彼を軽んじてはいけません」

◆ 現代の教会への適用

- ・ 働き人の評価基準：見た目・功績・経験ではなく、「【主】に仕えているかどうか」
- ・ 牧師・伝道者・宣教師・長老・執事・教師・すべての奉仕者を、世の基準で測らない
- 奉仕者が恐れなく、安心して、喜びをもって【主】に仕えられる教会を目指す

3) アポロについて（16:12）

－ 一致とは、互いの意思と務めを尊重することである －

- ・ コリント教会では「パウロ派・アポロ派」の分裂があった
- ・ 当のパウロはアポロと対立しておらず、むしろコリントに行くよう「強く勧めた」
- ・ アポロは「今のところ行く意志は全くない」—パウロはその判断を尊重した
 - 【主】にある一致＝同じタイミングで同じことをすることではない
 - 互いの務め・時・判断を尊重しながら、共に【主】に仕えていくこと

【まとめ】

- ・ 問題を抱える人・教会を諦めず、腰を据えて愛し、期待し続ける
- ・ すべての計画は「主がお許しになるなら」—【主】の主権への信頼と従順をもって歩む
- ・ 【主】のみわざに励む奉仕者を軽んじず、尊び、安心して仕えられる環境を整える
- ・ 真の一致＝互いの務め・時・判断を尊重しながら、共に【主】に仕えること